

## 言語と文化のつながり

3年3組38番 山本 和花

keyword : 「言語」「文化」「相互関係」「思考」「異文化理解」

## 1.はじめに

近年、グローバル化が進展し、ビジネスや教育、コミュニケーションなど多岐にわたる場面で、母国語以外の言語能力がますます重要視される国際社会が形成されつつある。私は国際高校での留学生との交流を通じて、異なる言語が単なるコミュニケーションの手段にとどまらず、それぞれの文化を反映し、さらに文化そのものを形成する重要な要素であることに気づいた。加えて、言語学習を進める中で、言語が持つ文化的な側面や、それがどのように人々の価値観や行動に影響を与えるかに強い興味を抱くようになった。言語と文化が互いに影響し合う関係性を探究し、異文化理解を深めることが、今日の多様化する社会において不可欠であると感じ、「言語と文化の相互関係から異文化理解を深める」というテーマに焦点を当てることにした。

## 2.序論

言語は、人間が思考や感情を表現し、意思疎通を図るための重要な手段であり、その背後には深い文化的背景が存在する。文化とは、特定の集団や社会における価値観、信念、習慣、芸術、そして生活様式を含む広範な概念であり、言語はその文化を伝達し、保存するための主要な手段となっている。言語と文化は相互に影響を及ぼし合い、言語の変化は文化の変化を反映し、文化もまた言語の発展に寄与する。

1921年に言語学者のエドワード・サピアが「使用する言語によって人間の思考は枠付けされている」とする今までになかった新たな言語論を出した。その後サピアの弟子であるベンジャミン・リー・ウォーフが取り入れ拡大させ、二人の仮説を合わせて『サピア＝ウォーフの仮説』と呼ばれている。彼らの仮説は「私たちの宇宙観や世界の把握の仕方、経験の様式、統率の仕方などは、私たちの用いる言語が異なれば、それに対応して異なる」という考え方だ。「言語は人間に対して経験の仕方を規定する働きを持ち、人間の思考が母語によってあらかじめ定められた形式に沿って展開する」とする考え方は「言語的相対性仮説 (linguistic relativity)」と呼ばれた。本論文では彼らの仮説をもとに言語と文化の相互関係を探究していき、国際社会を生きる人々の異文化理解への力添えとなることを期待する。

## 3.本論

彼らの仮説を具体的に考察していく際に、色彩認識は言語と文化が互いに影響を及ぼし合う例として挙げられる。日本語における「青」と「緑」の曖昧さは、日本の自然環境や伝統的な色彩感覚に深く結びついている。日本の伝統的な工芸品や風景画において、緑と青の境界が曖昧に描かれることがよくある。これは、日本人が長い間、自然と共生し、その中にある色彩を一つの連続体として捉えていたためであると考えられる。言語的に「青信号」と表現する現象も、単なる言葉の選択というよりは、文化的に共有された視覚的認識の影響である。このように、言語が文化的価値観や美意識に密接に関連していることがわかる。

一方、英語では「blue」と「green」が明確に区別されており、この区別は西洋における科学的アプローチや分類学に影響されている。特に、ルネサンス以降、科学的な視点から自然を分析し、細分化することが強調されてきた西洋文化においては、色もその一環として精密に分類されるようになった。したがって、言語はその社会が重視する知識や価値観を反映

し、それが言葉の選択に表れていると言えるだろう。つまり、言語が単に物理的な現象を表すだけでなく、文化がその現象をどのように解釈するかという枠組みをも与えているのだ。

空間認識を例にとると、オーストラリアの先住民グーグ・イミディル語では、地理的方位（「北」「南」など）で空間を表現するため、彼らは日常生活の中で常に方位を認識している必要がある。これは、彼らの文化が、広大な自然環境の中で生存し、正確な方位を把握することが重要な生活技術であるためだ。この文化的必要性が、言語の中で方位に基づく表現方法を強調する形で反映されているのだ。

対照的に、英語や日本語のような言語では、空間を身体基準で表現することが一般的である。「右」「左」という概念は、自分の体を基準にした相対的な位置を示しており、これが私たちの空間認識に大きな影響を与えている。都市化や移動手段の発達によって、私たちが日常的に生活する空間は、身体の向きや位置に依存することが多いため、このような表現が発達した。ここでも、言語はその文化的背景や生活環境に応じて発展し、人々がどのように空間を認識し、行動するかを形作っている。

さらに、時間に対する認識も、言語と文化の相互関係を示す重要な要素である。中国語では未来は「後ろ」、過去は「前」と表現される。中国では、過去は「目の前」にあり、すでに経験されているために見えるものとして捉えられ、未来はまだ見えない「背後」にあるものとされている。このような時間の捉え方は、長い歴史を重視し、先祖や伝統を敬う中国文化と密接に関連している。言語がこのように文化的な視点を表現することで、時間に対する意識や姿勢が形作られ、さらには日常の行動や価値観に影響を与えている。

一方で、英語圏の文化では、未来は「前方」にあり、進んでいくものとして捉えられている。この違いは、西洋文化が革新や進歩を重視し、未来に対して積極的に向かっていく姿勢を表している。このような文化的な価値観が、言語の中での時間表現に影響を与え、結果として時間に対する認知や期待に反映されているのだと考える。

これらの具体的な例から見て取れるように、言語は単なる情報伝達のツールではなく、文化的背景や価値観、環境と深く結びついている。言語を通じて文化が形作られる一方で、文化は言語の進化にも影響を与えているのだ。異なる文化圏の言語を学ぶことで、私たちはその言語が反映する独自の世界観や価値観を理解することができる。言語学習を通じて異文化理解が深まるのは、このような言語と文化の相互関係を体感し、その文化がどのように世界を捉えているのかを学ぶ機会が得られるからである。

#### 4. 結論

この探究を通して、言語と文化の相互関係は単純ではなく極めて複雑で多面的であることがわかった。色彩、空間、時間といった具体的な認識に影響を与えると同時に、文化的価値観や社会的慣習が言語の中に反映され、言語を通じて次世代へと継承されていく。このような相互関係を理解することで、異文化理解を深めるだけでなく、私たち自身の文化や価値観を再認識し、他者とのコミュニケーションを豊かにすることができるのだ。

#### 5. おわりに

私は今後も新たな言語を学び続け、より多くの人とのコミュニケーションを可能にしたいと考えている。今回の探究により異文化を受け入れグローバル社会に通づる国際的な感覚を身につけることができたと感じている。今後は言語と文化の関わりにおいて近代社会とのつながりについてより深く探究していこうと考えている。

#### 6. 参考文献・出典

- ・言語的相対性仮説・・・服部 裕幸(2003年)『言語哲学入門』 勁草書房

- ・グーグ・イミディル語…ガイ・ドイッチャー, 椋田直子(2022年)『言語が違えば、世界も違って見えるわけ』ハヤカワ文庫
- ・中国語…加藤宏樹『現代中国語の「時制」の意味研究』神奈川大学